



チーバくん

令和7年度 千葉県版チームオレンジ 活動事例集

令和8年3月

千葉県健康福祉部高齢者福祉課

目次

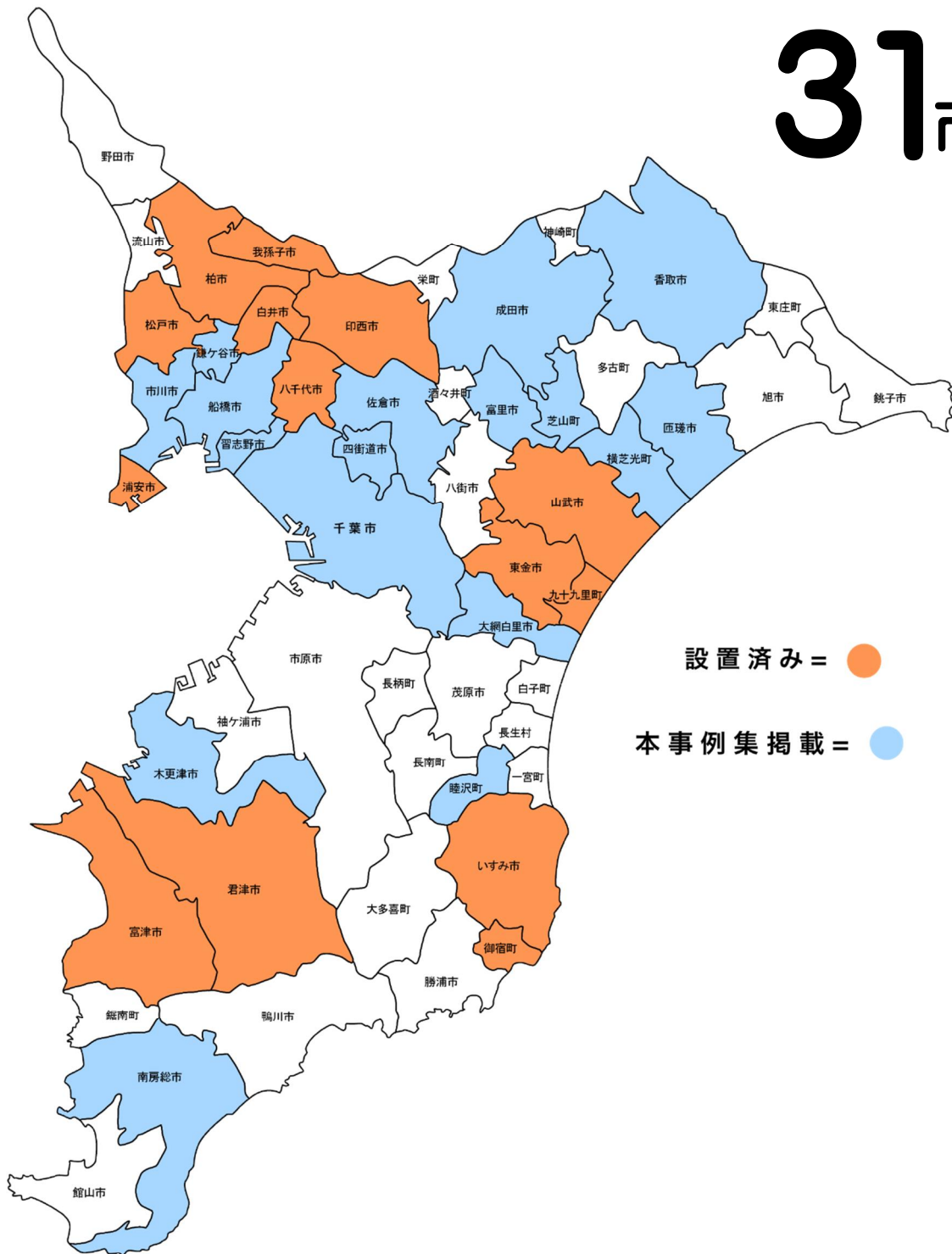
チームオレンジ設置市町村数 ①

様式概要 ②～⑤

千葉市	・	・	・	・	1
市川市	・	・	・	・	38
船橋市	・	・	・	・	50
木更津市	・	・	・	・	82
成田市	・	・	・	・	93
佐倉市	・	・	・	・	124
習志野市	・	・	・	・	132
鎌ヶ谷市	・	・	・	・	136
四街道市	・	・	・	・	140
富里市	・	・	・	・	148
南房総市	・	・	・	・	150
匝瑳市	・	・	・	・	152
香取市	・	・	・	・	156
大網白里市	・	・	・	・	159
芝山町	・	・	・	・	162
横芝光町	・	・	・	・	165
睦沢町	・	・	・	・	168

チームオレンジ設置市町村数

31市町



※色付き市町村は全て設置済み(令和7年3月末時点)

※オレンジ色はチームオレンジ設置済み。青色は本事例集掲載市町村です。

※色の付いていない一部市町村においても、チームオレンジ設置に向けて取り組みを進めています。

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

チームオレンジを結成した際の流れ（地域課題の状況、問題意識、きっかけ、関係機関への働きかけや調整、チームオレンジコーディネーターの役割、チームオレンジの元となる活動や取組等）と現在までの経過を記載しています。

4 活動内容

活動の内容について、写真や図なども使用しながら記載しています。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

認知症サポーターへの働きかけ、活動が軌道に乗るまでの流れ、認知症の御本人や地域の人へどう活動を広めていったか広報の方法など記載しています。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

講座時間や開催場所、講義の内容、講師の属性などを記載しています。

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

<課題>

8 チームのアピールポイント

9 今後の活動について

※1 チームオレンジの種類について

チームオレンジは、地域特性を鑑みて、以下の特徴的な3種類を参考に立ち上げます。

なお、自治体で数カ所立ち上げる場合、同一種類にする必要はありません。

(全国キャラバン・メイト連絡協議会発行「コーディネーター研修テキスト認知症サポーターチームオレンジ運営の手引き」から抜粋)

第1種類【共生志向の標準タイプ】地域の交流拠点（より所）を設置
<ul style="list-style-type: none">・サポーター等の活動の拠点であると共に、認知症の人と家族などが、いつでも訪れたいことができる普段からのより所とします。認知症の人の社会参加へのハードルが低くなります。・共に集うことにより、サポーターと認知症の人との「顔見知り」「なじみの関係」が成り立ちやすく、認知症状の変化や、困りごと等のマッチングと支援の迅速な対応が可能です。拠点は集まりやすい立地を選ぶことが重要です。・コーディネーターは、チームオレンジ立ち上げ後は、チームのスーパーバイザー的役割での参加となります。・サポーター以外（サポーター予備員）の多様な人々の参加を前提とする地域共生拠点への展望が望めます。
第2種類：【既存拠点活用タイプ】（既にある拠点の活用）
<ul style="list-style-type: none">・既に拠点がある「まちなかサロン」や「認知症カフェ」「介護予防教室」などをチームオレンジとして活用する方法です。・拠点の設置者や運営が介護事業者等の法人の場合は、住民サポーター主体の運営へシフトさせ、法人との協力関係の整理の必要があります。 この場合、まず、チームオレンジの三つの基本の整備から始めます。介護事業従事者はつながりの職域サポーターとして、あるいは住民サポーター（ステップアップ講座修了）として、法人は連携する関連機関として活動することなどの整理が必要になります。・既にサポーター主体で運営されているサロン等に関しては、チームオレンジ〇〇サロンへ移行できます。この場合であっても、サポーターのステップアップ講座修了と三つの基本の整備は必要です。・既存の活動とチームオレンジの活動を並行して行う場合の整理として、既存の活動をチームオレンジのメニューとして存続させる方法があります。
第3種類：【拠点を設置しない個別支援型タイプ】
<ul style="list-style-type: none">・活動拠点が確保できない場合にも実施できる方法です。・既存のサロンや認知症カフェなどへチームメンバーが訪問し、活動・支援することも考えられます。・集う拠点がないため、認知症の人の社会参加の機会が少なくなります。・サポーターや認知症の人、家族等との交流の機会が少ないため、困りごと支援のマッチングのための情報収集と調整に時間と手間が生じる可能性があります。・チームメンバー同士のコミュニケーションがとりづらいため、LINE やメール等を活用した運営が望まれます。・かつての「やすらぎ支援員」制度に類似しています。・チームリーダーの力量が求められ、チームオレンジ運営の難易度は高いと思われます。

※2 チームオレンジ三つの基本について

(全国キャラバン・メイト連絡協議会発行チームオレンジコーディネーター研修テキスト「認知症サポーター運営の手引き」から抜粋)

- ①ステップアップ講座修了及び予定のサポーターでチームが組まれている
- ②認知症の人もチームの一員として参加している（認知症の人の社会参加）
- ③認知症の人と家族の困りごとを早期から継続して支援ができる。

千葉市

チーム名
【ほっとくるカフェ】

タイトル
【自分の思いや気持ちを素直に話せる場】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
千葉市美浜区は こんなところ！ 人口：155,737 人 高齢化率：26.5%	千葉市美浜区は千葉市の西側に位置し、区の全域が埋立てにより造成された地域です。千葉市の6区のなかでは最も小さい区で、計画的に街づくりが進められています。区内には幕張メッセや千葉ロッテマリーンズのスタジアム、サッカー日本代表のトレーニング拠点である「夢フィールド」などがあり、身近なところでイベントやスポーツ観戦を楽しめます。 美浜区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は4ヶ所＋1出張所、認知症カフェは8ヶ所です。		

2 活動の概要

開始時期	令和3年11月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	認知症カフェ（茶話会・外出）
活動頻度	月2回（第2・4火曜日）
参加費	無料
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（外出時は自己負担） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（外出時は自己負担）

メンバー構成	代表：認知症サポーターステップアップ講座修了者 2 名 ○若年性認知症当事者 1 名 ○認知症サポーターステップアップ講座修了者 代表含む 3 名 ○民生委員 ○介護者家族 ○第 2 層生活支援コーディネーター磯辺圏域 （認知症地域支援推進員兼務） ○千葉市あんしんケアセンター職員
チームオレンジ コーディネーターの属性	第 2 層生活支援コーディネーター （認知症地域支援推進員兼務）
チームオレンジの類型 1	第 1 類型（共生志向の標準タイプ） 第 2 類型（既存拠点活用タイプ） 第 3 類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3 つの基本を満たしている 3 つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

令和 3 年 9 月、新たに出来る地域交流スペースの情報が生活支援コーディネーターに入り、スペース活用の説明会に認知症サポーターステップアップ講座修了者を呼んだことがきっかけで、生活支援コーディネーター、修了者、行政職員とで交流会を行う。交流会の中で、修了者から「介護者が孤立しない居場所をつくりたい」「認知症の人も活躍できる場をつくりたい」との声があり、同年 11 月に認知症カフェを立ち上げることになった。

4 活動内容







○認知症のこと、自分の近況や想い、地域のことなど、何でも自由に話をし、それをお互いに聞き合う。

○出かけてみたいところがあったら、相談して計画を立て出かけてみる。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

(1) 認知症サポーターへの働きかけ

行政から認知症サポーターステップアップ講座修了者名簿の情報提供を受け、修了者に声かけを行った。

認知症カフェを作ることを目的に修了者との交流会を開催したのではなく、修了生のやりたいことを大切にし、自発的に意欲をもって取り組んでもらえるようにした。

(2) 広報の方法

現在のメンバーは参加者が近所の方や知人を連れて集まった。

そのほか、チラシの配布や千葉市認知症カフェ一覧・千葉市認知症ナビへの掲載、口コミでの広報を行っている。

ほっとくるカフェの代表・副代表が大切にしていること

- ・その日の参加者の意見を大事にしながら、話す内容を決めていく。
- ・近況報告等、毎回全員が発言できる機会をつくり、お互いの関係性を深めていく。
- ・支援する側、される側という関係ではなく、対等な関係で参加できるようにする。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

ほっとくるカフェのメンバーのうち、代表を含む3名が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班「認知症サポーターステップアップ講座」が開催している認知症サポーターステップアップ講座に参加。

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

- ・前記「5」を大切にすることで、支援する側、支援される側という概念を超えて、参加者みんなが「仲間」という意識を持てるようになった。
- ・若年性認知症当事者の話を聞くことで、介護者は自分の介護を振り返るきっかけとなり、気持ちを整理することができるようになった。
- ・本人が発信することの重要性が分かった。

<課題>

- ・認知症に関する話を色々重ねてきたことで、「こういうことが出来たらいいのに」といったアイデアが出るようになったが、それをかたちにしていくにはどうしたらよいか。

8 チームのアピールポイント

認知症当事者、介護者（家族）、民生委員、行政職員、千葉市安心ケアセンター職員など、いろいろな立場の人が参加しながらカフェを開催している。

カフェでは毎回全員が一度は話をするようにしているので、お互いの状況を知ったり、考えていることを共有したりして関係性を築いている。

9 今後の活動について

これまでの活動を通して築けた関係性を大事にしながら、細く長く続けられるように工夫していく。

これまで通り、参加するみんなの意見を大切にしながら、新しい形の活動にもチャレンジしてみる。

千葉市

チーム名

【Green カフェ】

タイトル

【その人らしさを大切に】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
千葉市稲毛区は こんなところ！ 人口：158,325 人 高齢化率：27.3%	千葉市稲毛区は千葉市の北西部に位置し、区域の大半は住宅地です。千葉大学をはじめとする高等教育機関や研究機関が集中していることから、恵まれた教育環境を生かした文教のまちづくりを進めています。また、中心部には、県総合スポーツセンターや宮野木スポーツセンター、園生の森公園、いきいきプラザ・いきいきセンターなど、スポーツ・レクリエーションの拠点が数多くあります。 稲毛区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は5センター+1出張所、認知症カフェは10ヶ所です。		

2 活動の概要



開始時期	令和3年5月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	茶話会、本人ミーティング、本人ミーティングで出た「やりたいこと」を叶える活動（園芸、音楽鑑賞、ハンドベル演奏等）
活動頻度	毎月第1土曜日 13時30分～15時
参加費	無料
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	主催：介護予防の会 輝 認知症の人とその家族 認知症サポーターステップアップ講座修了者3名～ 第2層生活支援コーディネーター園生圏域 （認知症地域支援推進員兼務）

チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジの類型 1	第1類型(共生志向の標準タイプ) 第2類型(既存拠点活用タイプ) 第3類型(拠点を設置しない個別支援型タイプ) その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

平成28年2月：認知症カフェ「Greenカフェ」開始。
令和3年5月、行政からの紹介で傾聴ボランティア経験のある認知症サポーターステップアップ講座修了者1名がボランティアとして加わり、同月、カフェで「本人ミーティング」を開催。本人ミーティングでは「Greenカフェでやってみたいこと」をテーマに参加者が自由に発言し、翌月以降、その内容を叶える活動を実施することになった。

4 活動内容

(写真左：イラストの得意な修了者が当日の会話をイラストで表現)
(写真右：本人ミーティングで出た「植物を育てたい」を実現した写真)

チームオレンジ活動の一環として、認知症の方本人のやりたいことをお聞きし、認知症カフェの時間を利用して、認知症の方本人と協力し実現に向けて活動。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

(1) 認知症サポーターへの働きかけ

行政から圏域の認知症サポーターステップアップ講座修了者を紹介してもらい、修了者に声かけを行った。参加者の一人として楽しんで参加してもらい、認知症の方の隣に自然に座り声かけをしたり、傾聴してもらったりしている。

(2) 広報の方法

千葉市あんしんケアセンターからの紹介やチラシ配布、千葉市認知症カフェ一覧・千葉市認知症ナビへの掲載、口コミでの広報を行っている。

<主催者が大切にしていること>

- ・参加人数にはこだわらず、1人でも「ここに来てよかった」と言ってもらえる場所となること。
- ・認知症の方のやりたいことを一緒にできる場所となること。
- ・みんなで楽しめる場所になること。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

Green カフェのメンバーのうち、3名が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座に参加。

<講座の概要>

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

- ・本人ミーティングをきっかけにチームオレンジとしての活動を始めたことで、認知症の方を含め、参加者から思い出ややりたい事などをお聞きする機会が増え、参加者のことをより深く知ることができるようになり、カフェの運営企画にも役立てている。
- ・必要に応じて、参加者と認知症サポーターステップアップ講座修了者が1対1で話す場を設けるなど、臨機応変に対応することを心掛けている。

<課題>

- ・千葉市あんしんケアセンターからの紹介や、参加した方の口コミにより、少しずつ参加者が増えてきている。これからも紹介したい、参加したいと思ってもらえるような内容を取り入れながら続けていきたい。

8 チームのアピールポイント

認知症サポーターステップアップ講座を受けた介護経験者、栄養士、傾聴ボランティアや介護職経験者で構成されたチームで、和気あいあいとした雰囲気の中で楽しい時間を過ごせるメンバーです。

認知症の方、ご家族の方の参加をお待ちしています。

9 今後の活動について

参加された方が「ここがあってよかった」と思っていただけの居場所になれるように活動していきます。

千葉市

チーム名
【気楽に桜木】

タイトル
【本人と家族の思いを大切に】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
<p>千葉市若葉区は こんなところ！</p> <p>人口：146,463 人 高齢化率：30.7%</p>	<p>若葉区は千葉市の北東部に位置し、面積は6区内で一番広く約84.21 km²で東西に広がる地形です。</p> <p>若葉区の西部は、JRと千葉都市モノレールの駅があり、住宅が多く都心からの通勤圏内の地域でもあります。また、国の特別史跡に指定された日本最大級の貝塚「加曽利貝塚」や、美しい立ち姿で有名になったレッサーパンダの風太くんがいる「千葉市動物公園」があります。</p> <p>一方、千葉市内でも高齢化率が高い若葉区の東部は、農地や林地が広がる地域で、自然と触れあえる体験ができる公園や施設があり、人と自然が共存できる地域として農業の担い手育成にも力を入れています。</p> <p>若葉区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は5センター、認知症カフェは8ヶ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和4年3月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	茶話会、折り紙、ゲーム、モルック、体操、など
活動頻度	毎月第1土曜日（13時30分～15時30分） 毎月第3水曜日（10時00分～12時00分）
参加費	無料
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	主催：千葉市あんしんケアセンター桜木 認知症の人とその家族 認知症サポーターステップアップ講座修了者9名～ 第2層生活支援コーディネーター桜木圏域 （認知症地域支援推進員兼務） ○千葉市あんしんケアセンター職員

チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジの類型 1	第1類型(共生志向の標準タイプ) 第2類型(既存拠点活用タイプ) 第3類型(拠点を設置しない個別支援型タイプ) その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

<p>令和3年12月</p> <p>当時、地域に趣味のサークルの日程や場所などがわからなくなり迷子になり保護される認知症高齢者がおり、その方の居場所として千葉市あんしんケアセンターで立ち上げた認知症カフェである。</p> <p>令和4年1月から3月</p> <p>認知症サポーターステップアップ講座修了者へ認知症カフェへの参加と協力を呼びかけ顔合わせと話し合いを行い5名が賛同した。</p> <p>令和4年3月より現在</p> <p>認知症サポーターステップアップ講座修了者と共に本格的稼働となった。その後も協力者が増え、現在9名のサポーターがメンバーとなって自身の都合に合わせて参加協力している。</p>

4 活動内容

○参加者の方の「やりたいこと」を聞いて活動内容を決めている



折り鶴を作ってイベントに展示・配布しました



サポーターも一緒に草取り

加曽利貝塚で火起こし体験



思いのまま自由に作品づくり

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

【失敗したことと工夫したこと】

- ・会場から近いところにお住いの方については、サポーターが歩いて迎えに行くこともある。
- ・保健福祉センターの会場は必ずしも利用できるわけではなく、予約ができない場合は中止になることもあるが、令和7年の夏は、加曽利貝塚博物館に場所を変えて「加曽利貝塚ツアー」を開催した。

【配慮したこと】

- ・認知症であっても認知症でなくても、一緒に何かに取り組むことを考えている。
- ・当事者本人の「やりたいこと」が見つからない時は、会話の中からその方の思いなどを聞き取り、モチベーションに繋がるようにしている。
- ・当事者だけでなく家族介護者からの相談についても、サポーターが話を聞き気持ちに寄り添っている。そして必要に応じて多機関と連携を図っている。
- ・サポーター自身が活動する上で負担にならないよう、本人の都合に合わせて無理なく参加するようにしている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

気楽に桜木のメンバー全員が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座を修了している。

開催回数：4回/年　開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

【効果】

- ・参加者から「今日も楽しかった」など、喜びの声をいただくようになった。ご家族からも「カフェに参加した日は気持ちが落ち着いています」との報告もあった。
- ・カフェに通いたいが、デイサービスの日程と重なっている方に対し、担当のケアマネジャーが、カフェとデイサービス共に利用できるようプランを立て直し、社会参加の機会を増やすことができた。
- ・サポーターの特技を活かす場にもなっている。

【課題】

- ・会場まで一人で来られない当事者を家族介護者の送迎により参加しているが、家族への負担についても苦慮したい。レスパイトケアの必要性を感じている。

8 チームのアピールポイント

参加された当事者ご本人だけでなく、ご家族やサポーターにとっても「今日、参加してよかった」と思える居場所を目指しています。

9 今後の活動について

ご本人とご家族に寄り添って、ひとり一人の思いや気持ちを聞いて、「できたらいいな」をみんなでも実現できるよう、サポートしていきたい。

千葉市

チーム名

【Tea House わかば ~わかば散歩~】

タイトル

【認知症当事者の方が参加する地域の居場所サロン】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
<p>千葉市中央区は こんなところ！</p> <p>人口：220,144 人 高齢化率：22.1%</p>	<p>中央区は、千葉市の南西部に位置し、市制施行以来、県との政治・経済・文化の中心地として発展し、県庁、市役所をはじめ、各種公的機関が集中しています。また、JR 千葉駅を中心にして、銀行・デパート・オフィスビル等が集まり、商業・サービス機能など多くの都市機能が集積しています。</p> <p>区郊外の東部地区には、青葉の森公園や都市緑化植物園等公園施設や緑化が多くみられ、一方、臨海部は、千葉港のシンボルである、高さ 125m のポートタワー、人口海浜を備えたポートパーク、その他、大規模製鉄所などが立地し、東京湾岸に沿って京葉工業地帯を形成しています。フクダ電子アリーナは、Jリーグを始め各種イベントで大勢の方が利用されています。</p> <p>中央区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は 5 カ所+1 出張所、認知症カフェ 12 カ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	平成 26 年 1 月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	地域の居場所サロンとして、サロン ちばしいいき 体操 ランチ / 茶話会 わかば散歩 を実施しています。
活動頻度	わかば散歩 毎週火曜日 15:30 ~ 当事者が参加されるゆっくり散歩は第 4 火曜日 活動の詳細は https://www.facebook.com/teawakaba/ を 検索ください。
参加費	わかば散歩への参加は無料ですが、サロンやランチに参加 する場合は別途料金がかかります。
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）

メンバー構成	代表：認知症サポーターステップアップ講座修了者 ○認知症当事者 ○家族 民生委員 第2層生活支援コーディネーター松ヶ丘圏域 (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジの類型 1	第1類型(共生志向の標準タイプ) 第2類型(既存拠点活用タイプ) 第3類型(拠点を設置しない個別支援型タイプ) その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

わかば散歩に認知症当事者が参加するようになったのは、認知症地域支援推進員が認知症の症状があるご主人の相談を奥様から伺うようになったのがきっかけである。

ご主人から「外を自由に歩きたい」という要望を聴くことはできたものの、毎回の外出に奥様が付き添うには膝の状態がよくないということもあり、難しい状況だった。そこで、認知症地域支援推進員が奥様不在でも安心して歩くことができる活動につなげられないだろうかと考え、同じ町内にあるサロン代表(認知症サポーターステップアップ講座修了者)に事情を説明し、ご主人が散歩の活動に参加されるようになった。

地域の認知症当事者の方が参加しやすいように、第4火曜日に散歩速度をゆっくりとした「ゆっくり散歩」を実施した。

4 活動内容

散歩(1時間ほど)



5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

はじめは認知症である方が参加されることに戸惑いを見せる人もいたが、サロン代表の提案により、毎週やっている散歩のうち月1回を「ゆっくり散歩」とし、認知症当事者の方が参加しやすい形にした。

現在は、他の参加者からも「誰もが通る道かもしれないよね」「他の方も誘いたいね」など、認知症に対する理解が広がっている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

Tea House わかばの代表が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座を受講
< 講座の概要 >

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

< 効果 >

住み慣れた地域内での季節を感じながらのウォーキングは、認知症当事者の方に心の和らぎを感じさせることができている。現在は認知症当事者の方や家族、ご近所の方々の参加もあり、地域の中で介護予防・認知症予防への理解が得られてきている。

< 課題 >

サロンを運営している地域は高齢化が特に進んでおり、1人暮らしや高齢者介護世帯などで、今後ますますご近所同士の交流が大事になってきている。物忘れなどの症状が気になる方、外出が少なくなっている方などに対して、声かけができる環境が必要だと思われる。

8 チームのアピールポイント

わかば散歩は、筋力アップ・健康増進などのウォーキング効果に合わせて、地域の学校や福祉施設などへの訪問、季節を楽しみながら元気回復の場として活動している。

月1回の「ゆっくり散歩」は、病院や買い物ぐらゐの外出で地域との交流の少ない人にも声をかけているが、当日の参加者の状況や天候を見て公園で脳トレなども取り入れ、皆一緒に楽しんでいる。

9 今後の活動について

民生委員や千葉市あんしんケアセンターなどと連携し、今後も地域の方々へ情報を発信し、交流の場として地域拠点の場として、サロン活動を行いたい。

また、個人では行けない地域の場所でも団体なら行ける場所（地域の学校や福祉施設などへの訪問）があるため、少ない参加人数でも活動を継続して行いたい。

千葉市

チーム名

【ふみこさん家】

タイトル

【～古民家でほっこり人生を豊かに～】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
千葉市花見川区は こんなところ！ 人口：177,274 人 高齢化率：27.4%	<p>千葉市花見川区は千葉市の北西部に位置し、南北に長い形状で、6区の中でも2番目に人口が多く、約18万人の人々が生活しています。区域を縦断する花見川を中心に自然に囲まれたのどかな風景となっています。花見川流域に広がる農地では、野菜を中心とした都市型農業が営まれています。一方、内陸部には製造業を中心とした工場が進出し、工業団地を形成しているほか、南部にはJR総武線や京成線が通り、商業施設が見られます。また、JR幕張本郷駅周辺は幕張新都心の玄関口として発展を続けています。</p> <p>花見川区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は6ヶ所、認知症カフェは8ヶ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和5年7月	
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）	
活動内容	体操、歌唱、脳トレ、朗読、手芸、木工、園芸、名人お披露目、輪投げ、ペットボトルボーリング等	
活動頻度	毎月第2・4水曜日 10時～12時	
参加費	100円	
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）	
メンバー構成	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民 ・認知症サポーターステップアップ講座修了者 ・認知症の人とその家族 ・認知症の人と家族の会 ・花見川区第1層生活支援コーディネーター ・第2層生活支援コーディネーター幕張圏域（認知症地域支援推進員兼務） ・千葉市あんしんケアセンター職員 	

チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジの類型 1	第1類型(共生志向の標準タイプ) 第2類型(既存拠点活用タイプ) 第3類型(拠点を設置しない個別支援型タイプ) その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

交流があった認知症サポーターステップアップ講座修了者と生活支援コーディネーターが、新たに地域活動が出来る拠点を探していたところ、修了者の隣家の方が施設入所することになり、ご家族との間で空き家になった家を地域の集いの場にしたいと話が上がる。新たに地域活動を行いたい人、介護者、認知症サポーターステップアップ講座修了者、生活支援コーディネーターが拠点場所に集い3か月間話し合いを重ね「地縁 血縁が薄い人たちもゆるくつながれる場所づくり」を目的に掲げ、令和5年6月にプレオープン、同年7月に「ふみこさん家」を立ち上げた。

4 活動内容



ふみこさん家 チラシ



ふみこさん家 外観



参加者のご家族に作っていただいた看板。家族がモチーフになっている。



(写真:「ふみこさん家」の活動の様子)

「ふみこさん家」の名称は、活動場所のお家に住んでいらっかった「ふみこさん」の名前を残そうと運営者で考え名付けた。

開催時間を1部と2部に分け、1部は体操・脳トレ・歌唱・朗読、2部は運営者、参加者がやりたい事を行う活動。2部では地域の名人が芸を披露したり、参加者が自分たちでやりたい事を持ち寄り楽しんでいる。具体的には庭で農作業、手芸、ペットボトルボーリング、輪投げ、トランプ、おしゃべり、何もしない等。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

<工夫・配慮>

運営者がほぼ全員初めて顔を合わせる構成だったため、お互いを知る・理解を深めるために開催までの3か月間でたくさん話し合いをした。あくまでもボランティアなので、無理せず自分たちの出来る範囲で活動することを前提に、また運営者が一番楽しめる活動にすることを心掛けた。それらを踏まえて集いをするため、学習(ボランティアとは・助成金をもらう組織作り・リスク管理・保険等)・他の集いの見学等を実施。

<失敗>

活動場所が築100年以上の古民家なため、活動するたびに家屋の修繕が必要になった。

当初、運営費は参加費と運営の持ち寄りで活動する予定だったが、予想外に参加者が増え、運営資金が足りなかったため助成金申請となった。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

ふみこさん家の運営メンバーのうち2名が、千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座に参加。

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員(千葉市あんしんケアセンター職員、生活支援コーディネーター)

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

近所同士の声かけで認知症の方が参加され、また、千葉市あんしんケアセンターの紹介で参加するなど自然と認知症当事者や介護者が集まっている。運営に認知症サポーターステップ講座修了者がいることで意図せずチームオレンジの活動になっていた。

参加者参加型であるため、自分たちが集う場として参加者と運営者が共に「ふみこさん家」を作り上げていることも参加者がこの場を楽しみにし、大事にしている理由である。また全員が自然に声を掛け合い、気を遣い合うような関わりのため、ご近所同士の関係性が「顔見知り」から「声を掛け合える」関係性のある地域となった。

独居で血縁が薄い男性が、この活動に参加され「スーパーで他の参加者から声をかけられた」と嬉しそうに話してくれた。

活動するにあたり、参加者から毎回いただく参加費や助成金の使途、「ふみこさん家」の持ち主であるご家族のサポートについて、運営スタッフより参加者に説明を行ったところ、参加者が家の畑で作った野菜を、参加者へ販売して運営費の足しにしてほしいと無償で提供してくれた。

<課題>

運営者全員が認知症サポーターになっていない。

8 チームのアピールポイント

- ・運営者が一番楽しい場所
- ・楽しさは伝染る

9 今後の活動について

運営者・参加者が共に楽しみ出来る場所の継続

千葉市

チーム名 【FURU ちゃんちの認知笑カフェ 指先使って笑タイム】
タイトル 【 皆が笑顔になれる認知笑カフェ 】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
千葉市中央区は こんなところ！ 人口：220,144 人 高齢化率：22.1%	<p>中央区は、千葉市の南西部に位置し、市制施行以来、県都の政治・経済・文化の中心地として発展し、県庁、市役所をはじめ、各種公的機関が集中しています。また、JR 千葉駅を中心にして、銀行・デパート・オフィスビル等が集まり、商業・サービス機能など多くの都市機能が集積しています。</p> <p>区郊外の東部地区には、青葉の森公園や都市緑化植物園等公園施設や緑化が多くみられ、一方、臨海部は、千葉港のシンボルである、高さ 125m のポートタワー、人口海浜を備えたポートパーク、その他、大規模製鉄所などが立地し、東京湾岸に沿って京葉工業地帯を形成しています。フクダ電子アリーナは、Jリーグを始め各種イベントで大勢の方が利用されています。</p> <p>中央区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は 5 カ所+1 出張所、認知症カフェ 12 カ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和 5 年 9 月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	認知症カフェ（茶話会・作品作り）
活動頻度	毎月第 1 火曜日 14 時から 16 時
参加費	無料
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	○代表：認知症サポーターステップアップ講座修了者 ○認知症当事者 ○家族 ○住民サポーター ○民生委員 ○第 2 層生活支援コーディネーター松ヶ丘圏域 （認知症地域支援推進員兼務）

チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジの類型 1	第1類型(共生志向の標準タイプ) 第2類型(既存拠点活用タイプ) 第3類型(拠点を設置しない個別支援型タイプ) その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

令和5年4月認知症サポーターステップアップ講座修了者より「認知症カフェを開催したい」との相談あり、「FURUちゃんちの認知笑カフェ 指先使って笑タイム」を立ち上げることになった。

近隣住民の方や認知症当事者の方とご家族だけでなく、近隣の大学生や民生委員の方が活動に参加されている。

皆で笑いながらできることを協力し合って指先を使った作品を作っている。

4 活動内容

お茶を飲みながら認知症や介護に関すること、悩みや不安について、みなさんでお話している。指先を使った活動作品作りを行っている。



5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

認知症予防活動を通して地域で軽度認知障害を含めた認知症の方やご家族のサポートをして参加者が笑顔になれる認知笑カフェを目指している。

指先を使った作品作りは、できることを行って頂くため工程別に作業班を分けるなどの工夫をしている。

指先を使った作品作りは、強制ではなく個人個人のペースに合わせて行って頂いている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

代表が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座を受講

< 講座の概要 >

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

活動を重ねるごとに、活動に参加されている方が、ご自身の悩みを話したり、皆で笑いながら作品作りをしている様子がみられる。認知症当事者の方は、皆の笑顔や応援でご自身ができることをやろうとする意欲がみられている。初めて参加される方でも居心地のよい雰囲気となっている。

8 チームのアピールポイント

活動に参加されている方は「FURU ちゃんちの認知笑カフェ 指先使って笑タイム」に参加されることをとても楽しみにされています。誰でも気楽に活動に参加できる雰囲気があるチームで、活動に参加されている方全員が笑顔で過ごせる場所です。

9 今後の活動について

「FURU ちゃんちの認知笑カフェ 指先を使って笑タイム」での作品（輪投げ）を使って外で活動をする。新聞紙で作った袋を学校や施設などで使ってもらうことなどを考えている。

良い意味で「今まで通り」で活動を行っていきたいと思う。参加されている皆が笑顔になれる場所であり続けたい。

千葉市

チーム名
【カフェ和居和居】

タイトル
【 認知症カフェの立ち上げから、新たな出会いと社会参加へ 】

1 自治体情報（令和 7 年 12 月 31 日現在）



人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
千葉市中央区は こんなところ！ 人口：220,144 人 高齢化率：22.1%	<p>中央区は、千葉市の南西部に位置し、大正 10 年の市制施行以来、県都の政治・経済・文化の中心地として発展し、県庁、市役所をはじめ、各種公的機関が集中しています。</p> <p>また、JR 千葉駅を中心に、銀行・デパート・オフィスビル等が集まり、商業・サービス機能など多くの都市機能が集積しています。</p> <p>区郊外の東部地区には、青葉の森公園や都市緑化植物園等の公園施設や緑地が多くみられる一方、臨海部は、千葉港のシンボルであるポートタワー、人工海浜を備えたポートパーク、大規模製鉄所などが立地し、東京湾岸に沿って京葉工業地帯を形成しています。</p> <p>フクダ電子アリーナは、Jリーグを始め各種イベントで大勢の方が利用されています。</p> <p>中央区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は 5 カ所+1 出張所、認知症カフェは 12 カ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和 5 年 11 月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	認知症カフェの運営
活動頻度	毎月 1 回
参加費	無料
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	主催：認知症サポーターステップアップ講座修了者（以下、修了者）1 名、 認知症サポーター 1 名、他 3 名 参加：認知症の人、介護をしている人、地域住民、 民生委員、歯科医師、 中央区第 1 層生活支援コーディネーター

チームオレンジ コーディネーターの属性	第1層生活支援コーディネーター
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

令和3年11月	修了者が市主催の「認知症カフェ立ち上げ講座」を受講した。 集会所（活動場所）建て替え工事あり
令和5年1月	修了者が「認知症サポーターステップアップ講座修了者交流会」に参加し、ネットワークの構築を図った。
令和5年9月	認知症カフェの立ち上げに賛同した地域住民が「認知症サポーター養成講座」を受講し、協力者となった。 修了者と協力者が近隣の認知症カフェを見学した。
令和5年10月	認知症カフェの開催周知、補助金申請などの準備を行った。
令和5年11月	認知症カフェ「カフェ和居和居」初回開催。
令和6年1月	若年性認知症支援コーディネーターが、単身世帯の認知症の人（以下、A氏）の社会参加促進を目的に「カフェ和居和居」をマッチングした。 初回参加時に、A氏、A氏の別居親族、修了者、若年性認知症支援コーディネーターで、今後の支援体制について対面で協議。 A氏が同伴者なしでも確実に参加できるように、「カフェ和居和居」当日の朝、修了者からA氏へ電話連絡を入れることとした。
令和6年3月	修了者らの細やかな配慮もあり、徐々に信頼関係が構築されてきた。その結果、以前より修了者らが取り組んでいた散歩の会（毎月3回）や公園清掃（毎月2回）などに、A氏も参加するようになった。 なお、散歩の会では、集合・解散場所をA氏の自宅付近に設定することにより、安心・安全に配慮している。 A氏は、「カフェ和居和居」と散歩の会（画像参照）に毎回参加している。
(経過)	 

令和7年9月 認知症啓発イベント「認知症を理解しよう」(主催：千葉市)
散歩の会の行先をイベント会場に設定し、A氏と修了者らが揃ってこれに参加した。

令和7年10月 「若年性認知症の方と家族の集い」(主催：千葉市)
自宅～会場の移動を含め、A氏と修了者が揃ってこれに参加した。

4 活動内容

認知症カフェ「カフェ和居和居」

日時 毎月 第3日曜日 10:00～12:00
場所 千葉市中央区本町3丁目 本町公園内集会所
内容 交流、情報交換、ミニ講話等
備考 その名の通り、わいわい語り合い、安心して集える場を目指して、修了者が地域の仲間と一緒に始めた。チームオレンジの活動拠点である。「地域の憩いの場、仲間づくりの場として気軽に参加してほしい」という思いから、淹れたてのコーヒーや日本茶を提供している。



交流・情報交換



集会所外観 (OPEN の幟が目印)



チラシ

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

(1) 認知症カフェ運営において工夫したこと

周知のため、千葉市の生活支援サイト、千葉市認知症ナビ、千葉市認知症カフェ一覧に掲載するほか、コミュニティカフェなどでチラシを掲示・配架した。また、初回に限り、地域限定の無料新聞に折込チラシ(有料)を入れた。クチコミや紹介から参加につながるケースが多い。参加者がいつもと同じ顔触れであっても、毎回必ず自己紹介+ という形で、全員が平等に発言できる機会を意図的に設けるとともに、ファシリテーター(修了者)が必ず一言コメントを加え、参加者全員で共有している。なお、+ のトピックは、ファシリテーターが提示している。

(2) チームオレンジ活動として配慮したこと

認知症カフェ当日の朝、修了者からA氏へ電話連絡を入れている。認知症カフェ終了後は、修了者がA氏を自宅まで送っている(徒歩10分程度)。A氏の安心・安全への配慮はもちろんだが、道すがら会話を通して、相互理解や信頼関係を深める貴重な機会となっている。なお、A氏を自宅まで送った後は、A氏の別居親族へメールで一報を入れている。A氏はもちろん、A氏の別居親族や若年性認知症支援コーディネーターとの信頼関係構築を目指すとともに、随時連絡を取りあい、連携するようにしている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

代表が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座を受講

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

(1) 認知症カフェ運営

<効果>

地域に憩いの場、人と人がつながる場ができた。

民生委員や生活支援コーディネーターなど支援者とのネットワーク構築・深化が進んだ。

認知症カフェ運営やチームオレンジ活動の基盤として重要な町内自治会の理解・協力を得るとともに、町内自治会同士の交流が芽生えてきた。

これがきっかけとなり、カフェ和居和居主催の演奏会企画が進行中であり、活動の幅が広がっている。

<課題>

参加予定人数の把握（基本的に事前申込不要のため予測できない）

周知・集客の工夫（現在は口コミと紹介が主である）

世代交代を見据えた将来的な人材の確保

(2) チームオレンジ活動

<効果>

A氏は、認知症カフェの参加者へコーヒーをサーブするほど場に溶け込み、

さらに散歩の会や公園清掃にもレギュラーメンバーとして参加するようになった。「これまで仕事一辺倒だった」と言うA氏が地域で新たな仲間をつくり、

社会参加の機会を獲得・拡大している。

<課題>

認知症の人との約束のとりつけと定期的な参加

認知症の人の個別ニーズに適した地域活動のマッチング（感性や相性を含む）

認知症の人が社会参加をする際の安心・安全な移動手段の確保

8 チームのアピールポイント

「カフェ和居和居」という名前の通り、わいわい語り合い、集える場づくりを意識している。毎回、コーヒー豆を厳選・焙煎し、豆を挽きドリップして提供。『今日のコーヒー豆は何ですか?』と会話のきっかけになったり、場を和ませたりしている。

認知症予防に取り組むとともに、認知症になっても安心して暮らし続けることができるまちづくりを目指している。

あまり構えずに、その場にいる人たちが自然体で過ごせるように心がけている。

9 今後の活動について

出会いと縁とタイミングを大切にしながら、認知症カフェの運営ならびに、さり気ないチームオレンジ活動を継続する。

認知症予防ならびに認知症になっても安心して暮らし続けることができるまちづくりを目指し、以下の活動に取り組む。

ア 認知症スティグマの軽減（認知症関連情報の提供）

イ 活動基盤として町内自治会同士のつながりづくり（地区連協へ協力要請）

ウ 地域のつながりの拡大・深化（参加者にも協力を仰ぎ、必要な人へ活動を紹介）

エ 活動を通じた仲間づくり（散歩の会、健康講座、健康麻雀など）

千葉市

チーム名

【チームみつわちゃん デニーズみつわ台本人ミーティング】

タイトル

【認知症当事者のやりたい事を一緒に企画しかなえていく】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
<p>千葉市若葉区は こんなところ！</p> <p>人口：146,463 人 高齢化率：30.7%</p>	<p>若葉区は千葉市の北東部に位置し、面積は6区内で一番広く約84.21 km²で東西に広がる地形です。</p> <p>若葉区の西部は、JRと千葉都市モノレールの駅があり、住宅が多く都心からの通勤圏内の地域でもあります。また、国の特別史跡に指定された日本最大級の貝塚「加曽利貝塚」や、美しい立ち姿で有名になったレッサーパンダの風太くんがいる「千葉市動物公園」があります。</p> <p>一方、千葉市内でも高齢化率が高い若葉区の東部は、農地や林地が広がる地域で、自然と触れあえる体験ができる公園や施設があり、人と自然が共存できる地域として農業の担い手育成にも力を入れています。</p> <p>若葉区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は5センター、認知症カフェは8ヶ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和6年11月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	座談会・外出
活動頻度	2か月に1度
参加費	各自ワンオーダー制
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	認知症の方とその家族 認知症サポーターステップアップ講座修了者10名 第2層生活支援コーディネーターみつわ台圏域 （認知症地域支援推進員兼務） 千葉市あんしんケアセンター職員
チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター （認知症地域支援推進員兼務）

チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

令和5年8月、SOMPO ケアラヴィーレみつわ台より場所の提供を受け、以前より、認知症カフェを開催したいと希望される方と、認知症サポーター養成講座修了者の方を集めた。又、チームオレンジとしての活動として、認知症カフェ（みつわちゃんカフェ）を立ち上げ開催。助成金などの手続きのため、「チームみつわちゃん」と名称を決定した。

チームオレンジとして「みつわちゃんカフェに来られない方はどうするのか」という課題から、支え合いの会が主催で認知症カフェを立ち上げ「愛の手カフェ」の開催へと繋がった。

令和6年11月千葉市よりデニース活用の話あり、認知症当事者とデニース桜木での本人ミーティングに参加しているスタッフとチームみつわちゃんて本人ミーティングを開催する事となった。

4 活動内容

デニースでおいしいデザートなどを食べながら、認知症当事者の方の体験や希望など自由に語り合っていたり、行ってみたい所・したい事などを企画し、かなえていく。



5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

外出企画で、最寄り駅での待ち合わせ場所と時間を伝えたが、当事者の方とすれ違ってしまい、連絡を入れたらすでに現地の集合場所に行っていたことがあった。デニースや外出支援時に皆さんが安心して移動できるように密に連絡を入れ情報共有し、サポートしている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

本人ミーティングに参加しているメンバー全員が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座を受講。

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

< 効果 >

- ・認知症当事者は、外出の機会が増え、定期的に会える場所が出来、顔なじみの関係性が出来てきたことを喜ばれている。
- ・また認知症当事者でしかわからない気持ちや悩みを当事者同士で共有出来ている。
- ・気軽に話ができるようになった。
- ・認知症当事者の方の気持ちをスタッフにも直接伝えることができています。また話を聞こうとするスタッフの姿勢も見られている。

< 課題 >

- ・モノレールを利用して参加されている方がいるので、移動支援者との連絡方法を考えていく必要がある。

8 チームのアピールポイント

民生委員、認知症サポーターステップアップ講座を受けた介護経験者、傾聴ボランティア、認知症地域支援推進員等で構成されたチームで、美味しいデザートを食べながら、気兼ねなく安心してなんでも語り合える温かい場所をつくっています。楽しいひと時をお過ごしください。

9 今後の活動について

- ・ご本人の行きたいところ・したいことを叶えていきたい。
- ・参加した皆さんが「今日も楽しかった。参加して良かった。」と言っていただける活動をしていきたい。

千葉市

チーム名

【本人ミーティング in デニーズ千葉桜木町店】

タイトル

【～あなたはあなたのままでいい～認知症になっても活動できる地域づくり】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
<p>千葉市若葉区は こんなところ！</p> <p>人口：146,463 人 高齢化率：30.7%</p>	<p>若葉区は千葉市の北東部に位置し、面積は6区内で一番広く約84.21 km²で東西に広がる地形です。</p> <p>若葉区の西部は、JRと千葉都市モノレールの駅があり、住宅が多く都心からの通勤圏内の地域でもあります。また、国の特別史跡に指定された日本最大級の貝塚「加曽利貝塚」や、美しい立ち姿で有名になったレッサーパンダの風太くんがいる「千葉市動物公園」があります。</p> <p>一方、千葉市内でも高齢化率が高い若葉区の東部は、農地や林地が広がる地域で、自然と触れあえる体験ができる公園や施設があり、人と自然が共存できる地域として農業の担い手育成にも力を入れています。</p> <p>若葉区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は5センター、認知症カフェは8ヶ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和5年1月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	認知症になっても地域で活動できる仕組みづくり 本人や家族、サポーターとの交流会 「やってみたいこと」の提案、発信、取り組み
活動頻度	おおよそ2か月に1回の開催 時間は15時00分～16時30分
参加費	飲食代（ワンオーダー制）
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）

メンバー構成	主催：千葉市あんしんケアセンター桜木 認知症の人とその家族 認知症サポーターステップアップ講座修了者 第2層生活支援コーディネーター桜木圏域 (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジ コーディネーターの属性	第2層生活支援コーディネーター (認知症地域支援推進員兼務)
チームオレンジの種類 1	第1類型(共生志向の標準タイプ) 第2類型(既存拠点活用タイプ) 第3類型(拠点を設置しない個別支援型タイプ) その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

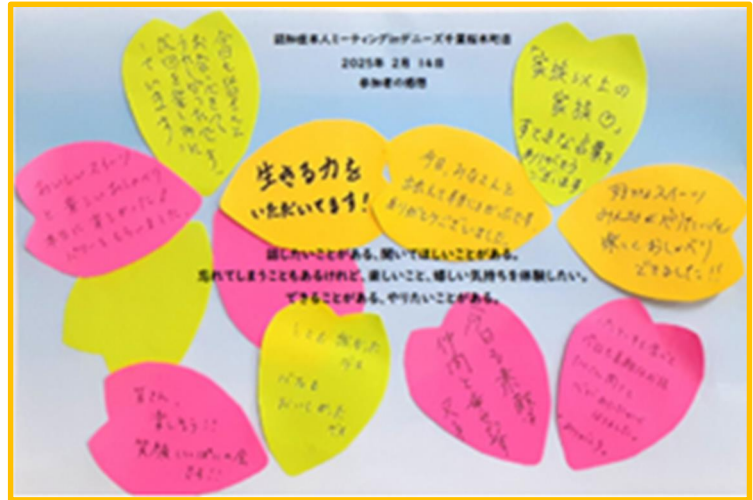
3 チームオレンジ結成までの流れと経過

<p>令和4年12月</p> <ul style="list-style-type: none"> 千葉市とデニーズから「本人ミーティング」の提案あり、千葉市あんしんケアセンター桜木で開催を検討 認知症のある方やご家族の方、地域の認知症サポーターに声掛けして参加者を募る <p>令和5年1月</p> <ul style="list-style-type: none"> デニーズのスタッフを対象に認知症サポーター養成講座を行う 同月26日開催となる <p>以降、2か月に1回のペースで開催している</p>
--

4 活動内容

<ul style="list-style-type: none"> ファミリーレストランデニーズ千葉桜木町店での「本人ミーティング」を行う 本人ミーティングで提案されたことに取り組む 外出企画「Goto 動物公園」「坂月川、夜の観賞会」「小倉ファーム見学」など行った





5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

- ・参加者同士で「みんなでやってみたいこと」話し合い活動に繋げている
- ・案内チラシに参加者の感想やコメントを掲載し、会の様子を発信している
- ・できるだけ参加者の都合にあわせて次の日程を決めている

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

デニーズ桜木のメンバーのうち、3名が千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座”が開催している認知症サポーターステップアップ講座に参加。

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員（千葉市あんしんケアセンター職員）

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

- ・外出や人との交流が減ってきた人にとって、何気ない日常の会話ができる定期的な社会参加の場になっている
- ・本人とサポーターが顔じみになり、さりげないサポートができる関係になっている。
- ・狭い地域内だけの活動になっている、行動範囲を広げたい。

8 チームのアピールポイント

- ・ひとりでは難しいことでも、皆で考え取り組み挑戦していきます。
- ・まずはデニーズ千葉桜木町店で一緒に、お茶を飲みながら思いを語り合しましょう。
- ・場所は、千葉都市モノレール桜木駅から徒歩1分。

9 今後の活動について

- ・参加したい人がいる限り開催していきたい。

千葉市

チーム名

【いつものカフェ】

タイトル

【 認知症カフェを軸にした活動の展開ならびに当事者との協働 】

1 自治体情報（令和7年12月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
986,605 人	259,082 人	26.3%	271.76K m ²
千葉市中央区は こんなところ！ 人口：220,144 人 高齢化率：22.1%	<p>中央区は、千葉市の南西部に位置し、市制施行以来、県都の政治・経済・文化の中心地として発展し、県庁、市役所をはじめ、各種公的機関が集中しています。また、JR 千葉駅を中心にして、銀行・デパート・オフィスビル等が集まり、商業・サービス機能など多くの都市機能が集積しています。</p> <p>区郊外の東部地区には、青葉の森公園や都市緑化植物園等公園施設や緑化が多くみられ、一方、臨海部は、千葉港のシンボルである、高さ 125m のポートタワー、人口海浜を備えたポートパーク、その他、大規模製鉄所などが立地し、東京湾岸に沿って京葉工業地帯を形成しています。フクダ電子アリーナは、Jリーグを始め各種イベントで大勢の方が利用されています。</p> <p>中央区の千葉市あんしんケアセンター（地域包括支援センター）は 5 カ所+1 出張所、認知症カフェ 12 カ所です。</p>		

2 活動の概要

開始時期	令和5年5月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	①認知症カフェの運営（フリートーク、手あそびマフ作り） 認知症サポーター養成講座の開催 イベント出展
活動頻度	認知症カフェ 毎月1回 認知症サポーター養成講座 年2回程度 イベント参加など 年3回程度
参加費	無料

運営財源	市町村からの委託 会費・参加費 上記の財源 市町村一般財源 その他（ ）	市町村からの補助 その他（ ） 地域支援事業交付金 （ ）
メンバー構成	主催：認知症サポーターステップアップ講座修了者 （キャラバンメイト） 参加：認知症の人、介護者、介護経験者、認知症サポーター、 認知症サポーターステップアップ講座修了者、 地域住民、作業療法士、生活支援コーディネーター等	
チームオレンジ コーディネーターの属性	第1層生活支援コーディネーター	
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他	
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている	

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

令和5年5月	地域の認知症の人とその介護者がきっかけとなり、認知症サポーター ステップアップ講座修了者（以下、修了者）が、レンタルスペースで 認知症カフェ「いつものカフェ」を立ち上げた。 これに伴い、令和4年9月より修了者がレンタルスペースで開催して いた認知症サポーター養成講座を「いつものカフェ」の活動として 位置づけた。
（経過）	「いつものカフェ」には認知症の人が数名参加している。 A氏は、ほぼ毎回参加している。
令和5年10月	「いつものカフェ」で手あそびマフ ¹ 作りのワークショップを開催 した。 1 認知症の人などが、触れたり手を通したりすることによって、不安を 和らげ、心穏やかに過ごせるようにするためのニット小物
令和5年11月	「いつものカフェ」が、おしゃべり部（フリートーク）と手あそび マフ部（手あそびマフづくり）を2本柱とした活動へ発展した。
令和6年5月	千葉市民活動支援センター（通称：ちばさぼ）に登録した。
令和6年12月	認知症サポーター養成講座の会場を、レンタルスペースから千葉市民 活動支援センターへ変更した。 A氏は当事者ならびに修了者として講座に参加しており、キャラバン メイト（修了者）の頼もしいパートナーである。

4 活動内容

(1) 認知症カフェ「いつものカフェ」

日時 毎月1回 第2土曜日 14:30～16:30 8月休み
 場所 千葉市中央区松波2-4-21 ベルフォンテーヌ1階
 西千葉アトリエカフェぴりーぶ
 内容 おしゃべり部(フリートーク) 手あそびマフ部(手あそびマフづくり)



主催者(修了者)



(左側)おしゃべり部



(右側)手あそびマフ部

手あそびマフ



フライヤー

(2) 認知症サポーター養成講座

日時 年2回程度
 場所 千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階
 千葉市民活動支援センター
 内容 認知症サポーター養成講座、いつものカフェ出前館(任意参加のフリートーク)



キャラバンメイト(修了者)



認知症サポーター養成講座



(3) イベント参加など

日時 年3回程度
 内容 認知症理解の推進、情報発信、認知症カフェや手あそびマフの紹介など
 実績

- ・ 認知症を理解しよう (会場: ショッピングモール)
- ・ 千葉市民活動フェスタ (会場: きぼーる)
- ・ ちばさば交流サロン (会場: 千葉市民活動支援センター)
- ・ 出張! 千葉市民活動支援センター (会場: 千葉市役所)
- ・ RUN 伴・RDD&ウエルフェスタ (会場: 千葉市役所)
- ・ ローカルラジオ生出演



認知症を理解しよう



RUN 伴・RDD&ウエルフェスタ



RUN 伴・RDD&ウエルフェスタ

他団体との出会いも大切に。(ポッチャ体験)



出張! 千葉市民活動支援センター



ちばさば交流サロンの(読み聞かせ)



ちばさば交流サロンの(情報提供)



ちばさば交流サロンの(フライヤー)

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

(1) 認知症カフェ運営において工夫したこと

周知のため、千葉市の生活支援サイト、千葉市認知症ナビ、千葉市認知症カフェ一覧に掲載するほか、各種イベントに参加している。

生活支援コーディネーターによる支援の一環として、認知症の人や介護者に「いつものカフェ」を紹介したり、民生委員などの支援者へ周知したり、コミュニティカフェ内にフライヤーを掲示・配架している。

構成員同士の情報共有・連絡手段として、SNSを活用している。困りごとを相談したり、認知症に関する情報や思いを共有したりするなど、交流の場にもなっている。

サポート体制を強化するとともに活動の幅を広げるため、千葉市民活動支援センターに登録した。

例：認知症サポーター養成講座開催時の会議室利用、イベント参加、

WEBサイト掲載、ニュースレター掲載、ロッカー利用など

ネットワークを活かしてイベントに参加するなど、認知症カフェという拠点にとどまらず、柔軟に活動を展開している。

(2) 認知症サポーター養成講座において工夫したこと

受講者が認知症に対する理解をさらに深めたり、具体的な活動につながるができるよう、認知症カフェや手あそびマフ、認知症サポーターステップアップ講座などの情報を提供している。

講座後は「いつものカフェ出前館」と称し、任意参加のフリートークタイムを設け、情報交換をしている。(30分程度)

(3) チームオレンジ活動において工夫したこと

A氏は当事者として、また修了者として、「いつものカフェ」や認知症サポーター養成講座、各種イベントに参加している。A氏は、自身の経験や思いなどを発信したり、そこで出会った人との対話を通して、認知症の理解促進を図るという重要な役割を果たしている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

主催者や協力者が、千葉市の認知症地域支援推進員の活動班“認知症サポーターステップアップ講座班”が開催している認知症サポーターステップアップ講座を受講

開催回数：4回/年 開催時間：4時間

開催場所：市役所、区保健福祉センター

講師：認知症地域支援推進員(千葉市あんしんケアセンター職員)

内容：千葉市認知症施策、認知症の基礎知識、コミュニケーションの基礎と実践、チームオレンジについて～受講修了後の活動紹介～、ボランティア登録について

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

(1) 認知症カフェ運営

<効果>

地域に語りと憩いの居場所、人と人がつながる場ができた。

手あそびマフづくりが広がった。

手あそびマフづくりがきっかけとなり、高齢者の社会参加やネットワークの構築（町内自治会やケアマネジャー、高齢者施設など）につながった。

千葉市民活動支援センターや生活支援コーディネーター（認知症地域支援推進員兼務）など、支援機関とのネットワーク構築・深化が進んだ。

認知症カフェ同士のネットワーク構築が進んだ。

認知症カフェやチームオレンジ活動の好事例として市内の講座で紹介されたことで見学者が来るようになり、認知度が向上した。

イベントで「いつものカフェ」の事例を紹介した結果、認知症カフェの創出につながった。

<課題>

地域住民や専門職への周知、認知度の向上

(2) 認知症サポーター養成講座

<効果>

受講者が「いつものカフェ」の参加・協力につながっており、講座は活動の賛同者と出会う可能性のある有益な場となっている。

<課題>

特になし

(3) チームオレンジ活動

<効果>

当事者であるA氏の言葉には、重みと現実味があり、周囲の人々に深い学びや気づきを与えている。介護に不安を感じ、悩んでいた人からは「A氏との対話を通して、本人の気持ちを置き去りにしていたことに気づき、ハッとした」との声もあった。A氏の果たす役割は大きい。

「あなたのままでいい」という寄り添いの言葉に勇気と安心をもらった。

「また参加したい」と思える居場所・活動である。(A氏)

介護者の思いを知ることができた。独りではないと気づき、自身の家族との関わり方に前向きな変化が生じた。(A氏)

<課題>

認知症の人が社会参加をする際の安心・安全な移動手段の確保

8 チームのアピールポイント

「いつものカフェ」は、認知症の人や介護者の思いに寄り添う場所である。身近な地域に悩みを相談できる場所、息抜きができる場所があることを知ってもらいたい。

9 今後の活動について

認知症の人、介護者、協力者などの立場を越えて皆で一緒に考えながら、活動を継続したい。

他の認知症カフェとのネットワークを深め、複数の認知症カフェで認知症の人や介護者をサポートする体制を構築したい。(例：お互いの活動を参加者へ紹介し合う)

「いつものカフェ」の活動やそこに関わる人たちの思いを広く発信したい。

当事者だからこそ分かること・できることを堪能したい。(A氏)

市川市

チーム名
【オレンジスマイルいちかわ】

タイトル
【認知症の人と一緒に、誰もが暮らしやすい市川をつくる】

1 自治体情報（令和7年3月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
496,089人	106,515人	21.5%	56.39K m ²
市川市は こんなところ！	市川市は、千葉県北西部に位置し、江戸川を隔てて東京都と相對しており、文教・住宅都市として発展を続けています。都心部と県内各地域を結ぶ広域交通が集中しており、JR・私鉄を合わせて7路線の鉄道が通っています。		

2 活動の概要

開始時期	令和7年1月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	オレンジスマイルいちかわ（ラン&ウォークイベント） オレンジスマイルカフェ（認知症カフェ）
活動頻度	年1回 年数回
参加費	3,000円（高校生以下2,000円） 500円程度
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（協賛金） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（民間企業・事業所）
メンバー構成	・一般住民 ・介護・福祉・医療専門職 ・地域包括支援センター職員
チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

2018年、2019年に認知症啓発の全国的なイベント「RUN 伴いちかわ」を開催した有志が、市川市の社会資源や事業者の参画と地域共生をめざすイベントとしてオレンジスマイルいちかわ実行委員会を立ち上げ、2022年から「オレンジスマイルいちかわ」を開催し、医療福祉専門職を中心に活動している。キャラバンメイトとして認知症サポーター養成講座の講師も行ってきた。2023年からは認知症カフェ「オレンジスマイルカフェ」をスタートし、市内のカフェなどを会場に年数回開催している。

4 活動内容

オレンジスマイルいちかわ（オレスマ）は、「認知症の人と一緒に、誰もが暮らしやすい市川をつくる」を合言葉に、認知症の理解啓発のみならず、市川市で活動する多様な人々が参画し、イベント参加を通して共生社会と健康への意識を高め、誰もが暮らしやすい市川をめざすプロジェクトで、次の2つの活動が柱となっている。

オレンジスマイルいちかわ（2022年から毎年1回開催）

市川市内を認知症当事者の方を含む市民の皆さんがラン＆ウォークでタスキをリレーしゴールをめざす。ゴール会場では認知症や健康をテーマとした催し、ステージイベントや出店ブースでランナーの到着を迎える。

オレスマ2025では市川市内3コース約35kmを30チーム105名の参加者がタスキをつないだ。ゴール会場（ニッケコルトンプラザ）では15団体がブースを出店、ステージイベントには7団体が出演し、認知症の理解や健康意識の啓発、共生社会へのPRを行った。



オレンジスマイルカフェ

認知症当事者やご家族だけでなく、居場所、ピアサポート（仲間通しの繋がり）、情報提供やアクティビティの場として幅広い世代が利用・交流できる共生型オープンカフェを目指している。

2025年度は理学療法士による健康体操や、認知症世界の歩き方ワークショップなども組み込み、参加型のプログラムもとりにいれている。



5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

認知症だけに焦点を絞るのではなく、オレスマ、オレンジスマイルカフェへ参加することで（ボランティアも含め）外へ出る、走る、歩く、他人とつながるなど、これまでとは違う出会いや自分自身の健康に目を向ける場となるよう取り組んでいる。オレンジスマイルいちかわのゴール会場には市内の障害者就労支援事業所の出店や、会場設営準備は働きづらさを抱える人たちにも手伝ってもらおう機会とするなど、多様な人々が関わるイベントとしている。オレスマ 2025 ではタスキリレー参加者が着用する T シャツのカラーをこれまでのオレンジに加えてオリーブ、ミントブルー、メトロブルー、ミックスレッドの 5 色から好きな色を選んで着用して頂いた。ボランティアも広く募り、中学生から 70 代までの市民の皆さんに参加していただいている。また市内の大学生が学生実行委員として加わり、アクティブラーニングの場として認知症クイズやスタンプラリー、パラスポーツ体験コーナーなどの企画運営を担っている。

オレンジスマイルカフェは市内のカフェや飲食店、お寺などから開催会場を提供して頂き、開催エリアの認知症地域支援推進員の協力も得て、多様なアクティビティを取り入れ、風通しの良さを心がけて運営している。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

市主催の認知症サポーターステップアップ講座を開催

【令和 6 年度講座情報】

開催回数：年 1 回 （令和 7 年度より年 2 回開催予定）

講座時間：3 時間 開催場所：市川市内

講座内容：認知症に関する講義、認知症ご本人からのメッセージ、チームオレンジについて、認知症サポーターの地域での活動紹介、グループワーク、交流会

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

これまでの活動を評価して頂き、(一社)日本認知症ケア学会より 2025 年度認知症ケア賞（実践ケア賞）を受賞した。4年間継続してきた中で、オレンジスマイルいちかわが少しずつ周知されてきていると実感している。開催趣旨に賛同していただける協賛企業、ゴールイベントへの出店希望も徐々に増えてきている。オレンジスマイルカフェは市内のコーヒーショップから継続的な会場提供を申し出て頂き、2026 年度から毎月開催できる見通しとなった。

<課題>

イベント認知度はまだ高いとは言えず、市民の耳に届く広報活動が必要。実行委員はそれぞれ本業を持っており制約がある中での活動。自前のスペースや資器材を持たないため、開催場所の確保や物品レンタルなどの手間や支出が生じるが、それらの課題を解決するために実行委員が活動することで理解・協力の輪が広がり、効果に結びついている。

8 チームのアピールポイント

オレンジスマイルいちかわ実行委員会是一般企業、高齢者施設、病院、相談支援機関など様々な職場で働くメンバーと大学生で構成されており、オレスマの趣旨に賛同した職種も肩書も年齢も様々なメンバーが毎月集まっている。オレンジスマイルカフェは障害者就労支援事業所のカフェや市内のコーヒーショップで開催し、地域の方の交流の場となるよう取り組んでいる。

9 今後の活動について

- ・オレンジスマイルいちかわ 2026（2026 年 11 月 15 日）
（2月から毎月実行委員会を開催）
- ・オレンジスマイルカフェ（概ね毎月1回の開催）
- ・市民活動団体との連携、相互交流

市川市

チーム名
【チームオレンジてこな】

タイトル
【安心して認知症になれる地域・社会を目指す。認知症フレンドリー社会の実現。】

1 自治体情報（令和7年3月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
496,089人	106,515人	21.5%	56.39K m ²
市川市は こんなところ！	市川市は、千葉県北西部に位置し、江戸川を隔てて東京都と対峙しており、文教・住宅都市として発展を続けています。都心部と県内各地域を結ぶ広域交通が集中しており、JR・私鉄を合わせて7路線の鉄道が通っています。		

2 活動の概要

開始時期	令和7年1月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	認知症カフェの開催等
活動頻度	月1~2回くらい
参加費	無料
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（運営ボランティア団体拠 出金） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	認知症当事者と家族、認知症サポーター養成講座受講者、 ステップアップ受講者、キャラバンメイト、 地域の認知症や高齢者の見守りケアに興味関心のある方
チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

- ・平成 29 年 10 月に前身となる「オレンジカフェすわだ」を開始。コロナ禍による休止を経て、現在の拠点で「オレンジカフェてこな」を月 1 回定期開催。
- ・相談内容の高度化・複雑化に対応するため、体制を強化し 10 名ほどのメンバーで「チームオレンジてこな」を結成。現在 20 名ほどのメンバーで活動中。

4 活動内容

(1) 認知症カフェの定期開催【活動の核】市内 3 拠点で認知症カフェを月一回定期開催。認知症の方やそのご家族、地域住民や医療介護福祉の専門職の誰もが参加でき、相談や情報交換、意見交換、おしゃべりをする場を提供。

オレンジカフェてこな <茶話会と軽運動>

「つながり」「学び」「安心して語れる場」「地域との接点」を大切にしている。



いきいき広場てらす <茶話会と軽運動>

地元企業京葉ガスのショールームだった場所が改修され、地域のコミュニティスペースになった「京葉ガステラス」を会場に開催している。令和 7 年 5 月より、7 回開催。



ターの獲得を推進。地域住民、企業、専門職が一体となった「顔の見える関係」を築くことが、認知症フレンドリーな共生社会につながると考えている。

- ・菅野マルシェ出展(R7/5/18)
- ・ライオンズマンション市川本八幡納涼会出店(R7/8/9)
- ・おにたかっ子まつり出店(R7/9/27)
- ・てらす解放 DAY 出店・サンロード秋まつり同日開催(R7/10/19)
- ・RUN 伴うらやす参加(R7/11/1)
- ・いちかわ市民まつり出店(R7/11/3)
- ・ふなばしオレンジフェス参加(R7/11/15)
- ・京葉ガステラス四周年祭出店(R7/12/13)



(5) 研修会・講習会への参加

相談ニーズの高度化・複雑化に伴い、最新知見や他地域の好事例を学ぶ研修会・講習会へ積極的に参加。参加後はメンバー間で知見共有し、個々の知識・対応力向上と組織全体の相談支援体制強化を図っている。

- ・市川市認知症サポーターステップアップ講座(R7/1/29)
- ・市川市認知症講演会(R7/10/24)
- ・千葉県認知症カフェフォーラム(R7/11/30)
- ・船橋市認知症シンポジウム(R7/12/6)

(6) 地域ケアシステム会議出席

地域課題の解決に向け、自治会や行政等で構成される関連会議に出席。チームオレンジや認知症カフェの周知を図るとともに、連携強化、協力体制の構築に取り組んでいる。

- ・真間地区地域ケアシステム推進連絡会(R7/2/27、6/23)
- ・八幡地区地域ケアシステム推進連絡会(R7/6/10、8/20、10/15)
- ・真間地区地域ケア個別会議(R7/6/23)

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

【ターゲットを絞った日時設定】 平日に行政窓口へ行けない現役世代（就労層）を考慮し、「土日午後」に開催。結果、市外からの相談者を含む潜在的なニーズに繋がった。

【柔軟なスタッフ体制】 家庭や仕事を優先し、短時間参加も認める体制とすることで、ボランティア活動参加の継続性を確保している。

【定期的な目的共有】 コアメンバーで半年ごとの振り返りを行い、活動目的の再確認と改善点の共有を習慣化している。

【初回来店者対応と連携】 ニーズを迅速に把握し、各高齢者サポートセンター（菅野須和田・八幡・真間）等、適切な専門窓口へ繋ぐ橋渡し機能を重視している。外出機会のなかった住民の参加促進を実現した。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

市主催の認知症サポーターステップアップ講座を開催

【令和6年度講座情報】

開催回数：年1回（令和7年度より年2回開催予定）

講座時間：3時間 開催場所：市川市内

講座内容：認知症に関する講義、認知症ご本人からのメッセージ、チームオレンジについて、認知症サポーターの地域での活動紹介、グループワーク、交流会

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

・常連の来店者も増え、認知症のことだけでなく介護のことや病気のこと地域のことなど、気軽に話せる雰囲気づくり、場づくりが出来ている。

・認知症の方(当事者やご家族)の参加が増えてきている。

・地域の特性か、認知症カフェに通っている所を知り合いに見られたくない、という人もいると聞く。認知症に対する誤解や偏見をなくし、気軽に来店できるような広報宣伝活動をしていきたい。

8 チームのアピールポイント

・「安心して認知症になれる地域・社会」「認知症フレンドリー社会」を目指し、地域の認知症に関する課題解決に取り組む活動を展開していく。

・『基本的な考え方：三つの基本』を活動基盤に、認知症サポーターの育成やスキルアップ講座、地域交流の促進、早期発見と支援体制づくりを進めていく。

・地域資源を最大限活用し、行政や医療機関との連携を強化しながら、住民・企業・専門職が一体となった「顔の見える関係づくり」を推進する。

9 今後の活動について

・市内3か所の認知症カフェを拠点として、月1回の定期開催を継続する。

・当事者の生活ニーズを把握し、困難になった活動の継続を支援・見守る場を提供。

・キャラバンメイト資格取得者の増加を活かし、養成講座の開催を増やす。

・認知症サポーターとの連携を深め、ボランティアスタッフの拡充を図る。

・認知症家族交流会を開催する。

・関係団体や生活関連企業、社会福祉法人、グループホーム等との連携を強化する。

・市内外の認知症カフェ運営者やチームオレンジとの横のつながりを築き、面で支える体制を構築する。

・コアメンバー間でKPIを設定・共有し、中長期的な活動改善に活かす。

市川市

チーム名 【 えんがわの会 】
タイトル 【 認知症 café「縁側とにわにわ」の活動をとおして 】

1 自治体情報（令和7年3月31日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
496,089 人	106,515 人	21.5%	56.39K m ²
市川市は こんなところ！	市川市は、千葉県北西部に位置し、江戸川を隔てて東京都と対峙しており、文教・住宅都市として発展を続けています。都心部と県内各地域を結ぶ広域交通が集中しており、JR・私鉄を合わせて7路線の鉄道が通っています。		

2 活動の概要

開始時期	令和7年1月スタート
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	Café「縁側とにわにわ」の運営と地域活動への参加等
活動頻度	月2回（企画と運営）及び随時
参加費	300円
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（ ） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	・認知症サポーター養成講座終了者 2名 ・認知症サポーターステップアップ修了者 4名 ・地域住民 1名
チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、地域の高齢者の活動の場が制限されたり無くなって行く中で、何か集いの場があればいいねという思いから、認知症 café「縁側とにわにわ」を立ち上げる。名称は、認知症当事者の男性が美しい日本語を使って欲しいと名付けていただいた。すでに地域で活動している色々な団体や市及び市川市高齢者サポートセンターの協力を得て進めている。

4 活動内容

café「縁側とにわにわ」は毎月第3火曜日 13時30分から15時30分に「当事者や家族と共に楽しもうカフェ」を開催。地域の認知症当事者及び介護者、地域の高齢者やシニアの方々等、時には子供も参加している。



(学ぼう!!風呂敷のアイデア使い)



(懐かしさに触れて楽しもう縁日と盆踊り)

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

- ・企画の柱は認知症予防体操と月別の活動。大事にしている事は参加者が「楽しむ事」「学ぶ事」「つながる事」をイメージしながら企画している。毎月のパンフレットは地域の公民館や市役所のボランティア活動欄、市川市高齢者サポートセンターに配布。
- ・当事者が参加した際には認知症サポーターや介護現場で働いていた経験が有る方が何気なく活動のサポートに入り、会話や発言が出来る雰囲気を作っている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

市主催の認知症サポーターステップアップ講座を開催

【令和6年度講座情報】

開催回数：年1回（令和7年度より年2回開催予定）

講座時間：3時間 開催場所：市川市内

講座内容：認知症に関する講義、認知症ご本人からのメッセージ、チームオレンジについて、認知症サポーターの地域での活動紹介、グループワーク、交流会

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果> 活動を続けてきた事で参加者も増え地域に根づいてきている。又参加者の自主的な意見も出てきており活動に反映。関りが深まり参加者同士がCafé以外の地域活動への参加も見られる。

<課題> 地域の中で認知症当事者や家族と共に、当事者に対する対応と理解を深める中で居場所づくりを継続していく。

8 チームのアピールポイント

過去に介護現場で働いていた方々や高齢者向けの体操指導員をしていた方と、多彩な経験を持っているチームメンバーのため、認知症への理解は深く、より楽しい運営が出来ている。

9 今後の活動について

関りが深くなり Café「縁側とにわにわ」の運営は安定しているので、今後は新しい体験や地域の方々とのつながりを深めながらより地域に根づいて行く。

船橋市

チーム名 【アルビス前原ケア連】
タイトル 【地域住民と共に我が地区を考え、発足したチームオレンジ】

1 自治体情報（令和7年4月1日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
650,768 人	155,059 人	23.8%	85.62K m ²
船橋市は こんなところ！	船橋市は千葉県の北西部に位置し、都心や成田空港から近く発達した交通網を持ちます。豊かな自然もあり非常に恵まれた立地条件を備えたまちです。また中核市では1番の人口を誇る都市です。		

2 活動の概要

開始時期	令和5年3月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	おしゃべりサロン、定例会、その他必要に応じて
活動頻度	毎月第4火曜日 13:00～14:00 サロン 14:00～15:00 定例会
参加費	なし
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（なし） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	コーディネーター（地域包括支援センター） リーダー（住民サポーター） 住民サポーター（民生委員） 職域サポーター（UR職員、居宅介護事業所職員、福祉用具 専門相談員） 認知症の人本人、認知症の人の家族
チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他

チームオレンジ三つの基本
について 2

3つの基本を満たしている

3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

R3年夏にこの自治会地区にて認知症徘徊等も多く、包括からURと自治会に支援者での共有機会を提案。R3.10月に包括、UR、民生委員にて会合し、「アルビス前原ケア連」発足。チームオレンジの説明に賛同され、3ヵ月に1回会合し、気になる高齢者と地区の課題を共有。コロナ禍のフレイル、認知症予防として、R4.5月から包括と他地区活動の「まえばら健康ウォークラリー」に共催。詐欺被害の課題には、8月に防犯対策セミナーを開催。8/3認知症サポーターステップアップ講座をメンバーで開催し、認知症の人や家族の人の話ができる場を作ることとなった。10月からは毎月会合し、12月から「おしゃべりサロン」を毎月開催。毎回参加する認知症の人や家族がチームオレンジの活動に登録され、R5.3月にチームオレンジとして成立に至った。

4 活動内容

〇月1回UR集会所にて、「おしゃべりサロン」を開催。認知症の人とオレンジサポーター（チーム員登録者）および地域の人とのつながり、作業活動やレク活動、おしゃべりの場、介護者家族の交流機会、認知症の理解啓発の場としている。地域の気になる認知症の人や家族に声をかけ、本人のやりたいことや意欲につながるサポートをしている。必要時はチーム員が自宅訪問し、話し相手、サロン参加の促しなど出前方式。また、随時自治会会館も活用している。



Merry Christmas!

おしゃべりサロン

日時：令和7年12月23日（火）13時～14時
場所：アルビス前原集会所・アジサイ・コスモス
定員：10名
参加費：無料※事前申し込み不要
内容：おしゃべり、工作、体操、介護予防・認知症の講話、介護相談など

クリスマスだからみんなで楽しく過ごしましょう！

一緒にしゃべりましょう♪

集会所でみんなが待ってる♪

お申込み先：前原団地自治会 窪田
電話 047-475-1842
9:30～16:00(水曜日を除く)

主催：アルビス前原ケア連
前原地域包括支援センター・前原団地自治会・民生児童委員・URコミュニティ



○オレンジフェスタに出張チームオレンジとして参加



○認知症の方やその家族に、「まえばら健康ウォークラリー」や「みたけ神社カフェ」（月1回）への参加の声かけや一緒にコースを歩いている。



○月1回チーム員での定例会を行い、おしゃべりサロンの参加者の共有や気になる高齢者、地区の課題など共有している。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

チームオレンジの体制整備の為に、市から地区社会福祉協議会に協力の依頼。地域ケア会議にて共有をした。しかし、チームオレンジの箱だけを作ってもボランティアする人は変わらず、支援が増える訳ではないとの声あり、主旨は伝わらず、進展はなかった。自分達が必要と思えること（我が事）が大切と考え、自治会代表者やURに認知症の方の支援や高齢者の支援に関して投げかけをし、「アルビス前原ケア連」が発足した。ステップアップ講座は多数に広報しても受講だけで終わり、オレンジサポーターの活動への結びつきは難しいと考え、意欲のあるメンバーとしてアルビス前原ケア連のメンバーに限定して実施した。ステップアップ講座で地区の課題（認知症カフェや支える場なし）を共有することで、具体的活動に繋がった。

認知症の人でサービス利用なく、地域との交流が少ない方には個別で声かけしている。おしゃべりサロンの前日に電話やチーム員が当日訪問し、おしゃべりサロンへの参加を促している。初回は専門職と住民サポーターが同行訪問し、上手くいったが、住民サポーターのみで訪問時に本人がご立腹してしまった状況があった。本人の気分により無理強いしないなど対応を変えていくことを勉強していかなくてはならないと感じている。本人の意向に合わせ、話を聞く、好きな作業活動を一緒に行う等している。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

市内 24 地区で R3～R8 年度までに、チームオレンジ立ち上げに向けて各地区で地域包括支援センター職員を中心に開催。ステップアップ講座の内容は認知症施策推進会議チームオレンジ作業部会で作成。「気づき」「受け止め」「つなぎ」をポイントとした内容。

【前原地区開催状況】年 1 回開催

R4.8.3 アルビスケア連メンバーで、ステップアップ講座開催。7 名参加（6 名登録）

R5.10.24 チーム員未受講の方とおしゃべりサロン参加者（認知症家族含め興味がある方）14 名参加（8 名登録）

R6.11.26 チーム員で未受講の方、新たなチーム員希望者、認知症の本人・家族等 20 名が参加（4 名登録）

R7.10.28 おしゃべりサロン参加者で、未受講の方と地域の方に向けて開催。12 名参加（2 名登録）

【講座内容】

- ・1 回 3 時間 集会所にて、おしゃべりサロンの隣の部屋で開催
- ・チームオレンジコーディネーター及び認知症地域支援推進員（地域包括支援センター職員）の 1～2 名で講師
- ・上記、ステップアップ講座の内容に、認知症の人の気持ちや家族の気持ち、当地区の課題と活動紹介、身近なチームオレンジの具体例を紹介した内容。

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

- ・介護者同士が交流で、情報交換や気分転換の場となる。
- ・サービス未利用の認知症がある方で、本人のサロン参加からサービス利用に繋がった。介護者の不安や負担の緩和になっている。
- ・地域の気になる高齢者にオレンジサポーター（チーム員）が声をかけ、認知症の疑いを感じ、チーム員で共有し、サロンへのつなぎや専門職への相談に繋がっている。（気づきや受け止め、つなぎの機会の増加）
- ・サロンだけでなく、地域の活動への誘いなどにも繋がっている。
- ・住民サポーター主体で、作業活動や合唱などの活動ができています。
- ・現在、若年性 MCI の方の参加があり、今後はボランティアとしても活動して頂く方向にある。

<課題>

- ・オレンジサポーターでない地域の方と交流機会も持っているが、認知症の人への対応の理解が難しい場面もあり、参加者への理解啓発は必要である。
- ・介護負担のあるサービス未利用の本人宅に職域サポーターが訪問し、自宅で面談やサロンへ誘うが、本人の気分により、参加できないこともある。チームで共有し、対応方法を検討していくことや専門職への引継ぎも検討していく。
- ・チーム員の認知症の本人や介護者の卒業（サービス利用や転居等）があり、介護者同士の情報交換の場が出来なくなってきたため、おしゃべりサロンの広報の検討要す。
- ・現在は自治会や参加者の中から持ち寄り、やりたいことや興味がある作業活動やお茶などを提供しているが、活動内容により財源確保の検討要す。

8 チームのアピールポイント

「おしゃべりサロン」は認知症の人、介護者、地域住民問わず自由に参加可能。サロンの中で認知症の人、家族、地域住民との交流の場であり、認知症や介護予防などの情報交換や専門職との相談により、対応の仕方の共有やご本人のアプローチを共有している。時には認知症のご本人宅に訪問して、話相手やサロンにお誘いもしている。サロンはおしゃべりだけでなく、認知症の人や家族などとやりたいことや興味あることを共有して、次回の内容を決めている。認知症の人や家族、高齢者などの居場所となるようオレンジサポーターが自然にサポートしている。またサロンだけでなく、地域での声かけや地域活動でもオレンジサポーターがサポートしてくれており、一緒に地域で暮らせる仲間としてチーム活動している。

9 今後の活動について

我が事として認知症の人やその家族一人一人の気持ちを大切に活動していく事を基本とし、サロン開催にとどまらず、認知症の人やその家族と地域とが自然につながり、互いにサポートできる地域となるよう、地区の課題を共有しながら、住民や団体、産業などと繋がっていく活動をしていく。

船橋市

チーム名

【パークサイド船橋 健康支援委員会】

タイトル

【 高齢者が互いの交流を深めながら、安心した生活を送れる地域を目指して 】

1 自治体情報（令和7年4月1日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
650,768 人	155,059 人	23.8%	85.62K m ²
船橋市は こんなところ！	船橋市は千葉県の北西部に位置し、都心や成田空港から近く発達した交通網を持ちます。豊かな自然もあり非常に恵まれた立地条件を備えたまちです。また中核市では1番の人口を誇る都市です。		

2 活動の概要

開始時期	令和6年3月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	パークサイド船橋(マンションの名称)の住民への巡回訪問（見守り・声掛け）や巡回訪問の情報共有、サロンの開催、見守りで認知症など気になる高齢者家族に対し支援者へのつなぎ等
活動頻度	・毎週日曜日巡回訪問 ・毎月第2日曜日委員会でメンバーが集まり情報共有 ・毎月1回 独居高齢者対象でサロン開催
参加費	なし
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他（なし） 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	コーディネーター（地域包括支援センター） リーダー（住民サポーター） 住民サポーター 職域サポーター（在宅介護支援センター）
チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）

<p>チームオレンジの類型 1</p>	<p>第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他</p>
<p>チームオレンジ三つの基本 について 2</p>	<p>3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている</p>

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

パークサイド船橋の健康支援委員会は孤独死防止を目的に、令和元年10月から巡回訪問を開始していた。

今までは委員会のみ活動であったが、関係機関とのつながりを強化し、見守り、声掛けを通して認知症を始めとした気になる高齢者やその家族への支援を円滑にできる活動をしていきたいと意向があることを包括支援センターで把握し、チームオレンジとしての活動を立ち上げることを検討した。

海神地区でチームオレンジの活動を立ち上げることを周知する目的で、民協会長・町会自治会兼海神地区社会福祉協議会会長へチームオレンジの体制整備を進めていくことについての事業内容の説明を行った。

民協・町会自治会執行部会・社会福祉協議会・地域ケア会議には事業内容の説明とパークサイド船橋での立ち上げの情報共有を行った。

- 1) パークサイド船橋健康支援委員会の活動のキーマンと民生委員へ事業説明と地域で困っていることなどの意見交換を行った。
- 2) 代表・役員への事業説明、地域で困っていることなどの意見交換、活動の合意を得る。
- 3) 全体会議での事業説明、意見交換からのチームオレンジの立ち上げの合意を得る。
- 4) 認知症サポーター養成講座を開催。
- 5) ボランティアの反応を見ながら、再度代表・役員と意見交換をし、チームオレンジの立ち上げについての、再確認と立ち上げまでのスケジュールを計画する。
- 6) ステップアップ講座を開催し、令和6年3月チームオレンジを立ち上げた。

令和6年8月からパークサイド船橋の健康支援委員会主催のサロン（対象者は独居高齢者メイン）を月1回開催することとなった。

4 活動内容

- ・週に1回当番でパークサイドの希望者の住民に巡回訪問（見守り・声掛け）
- ・月に1回メンバーで集まり、巡回訪問の情報共有。
- ・見守りで認知症など気になる高齢者家族に対し支援者へ相談しつなげる。
- ・年に1回パークサイドの住民に対し巡回訪問の希望を確認する。
- ・月1回サロン（対象者は独居高齢者メイン）の開催。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

<工夫・配慮したこと>

- ・サロン、委員会にコーディネーターも適宜参加し、気になる高齢者の共有や相談対応を行う。
- ・コーディネーターから、サポーターやサロン参加者へ詐欺の注意喚起、季節に合わせた情報など、レクチャーを行いながら、相談先として地域包括支援センターや在宅介護支援センターの周知を行う。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

<講座内容>

- ・「気づき」「受け止め」「つなぎ」をポイントとした内容（ロールプレイを含む約180分）
- ・講師は、チームオレンジコーディネーター（地域包括支援センター職員）が行った。

<開催状況>

- ・受講者の意向に合わせ、R5.11.12、R5.12.10、R6.1.14、R6.3.10の4回に分けて開催した。

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

- ・認知症の対応に苦慮していた家族に対し、相談先としてコーディネーターにつながり、家族が抱え込まず、スピーディに支援をすることができた。
- ・月1回サロンを開催することで、高齢者の交流できる居場所を作ることができた。

8 チームのアピールポイント

孤独死防止を目的に、令和元年10月から巡回訪問を開始。

今までは委員会のみ活動であったが、チームオレンジとして関係機関とのつなぎを強化し、見守り、声掛けを通して認知症を始めとした気になる高齢者やその家族への支援を円滑にできる活動を目指している。

9 今後の活動について

これまでの活動を無理なく継続していく。

船橋市

チーム名 【咲が丘チーム結(きづな)繋】
タイトル 【身近なご近所つながりで、気づき・つなげていくために】

1 自治体情報(令和7年4月1日現在)

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
650,768人	155,059人	23.8%	85.62K m ²
船橋市は こんなところ！	船橋市は千葉県の北西部に位置し、都心や成田空港から近く発達した交通網を持ちます。豊かな自然もあり非常に恵まれた立地条件を備えたまちです。また中核市では1番の人口を誇る都市です。		

2 活動の概要

開始時期	令和6年4月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他()
活動内容	・日常生活における見守り活動 ・年1回以上の学習懇談会 ・チームや代表者の広報
活動頻度	・見守り活動は随時 ・学習懇談会は年1回
参加費	なし
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他(なし) 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他()
メンバー構成	コーディネーター(地域包括支援センター) リーダー(住民サポーター) 住民サポーター 職域サポーター(在宅介護支援センター)
チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター(認知症地域支援推進員)

チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

地区の社協・民児協・自治会長と懇談し、チームオレンジの趣旨を説明した。趣旨は理解し賛同いただいたが、3団体で担うには困難との事で、新たな地域の団体を紹介いただいた。そこへ一つ一つ当たっていき、その中で咲が丘自治会の会長がぜひ立ち上げたいとのことで話が進み、令和6年4月に立ち上げとなった。
R7年度はリーダー等との打ち合わせを1回実施、今後メンバーとの交流会・学習会を企画している。

4 活動内容

- ・日常生活における見守り活動
- ・年1回以上の学習懇談会
- ・チームや代表者の広報

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

<工夫・配慮したこと>

- ・地域で主要な会長（社協、民児協、自治会長）にまずは話を通し、趣旨を理解し賛同いただけることを一番に実施した。包括・在支が把握している地域の団体もあったが、時間がかかってもまずは会長からご紹介いただいたところへ当たる等、地域の主要な支援者からつながるようにした。
- ・思いのある自治会長につながり、立ち上げに向けて動いた際にも、会長の思いとチームリーダー候補者と在支・包括が方向性を共有できるよう事前打ち合わせを行った。チームオレンジ実施後の振り返りと次年度に向けた活動の方向性を共有した。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

<講座内容>

- ・「気づき」「受け止め」「つなぎ」をポイントとした内容。またロールプレイを取り入れ、アクティブラーニング形式とした（約180分）
- ・講師はチームオレンジコーディネーター（地域包括支援センター職員）

<開催状況>

- ・受講者の意向に合わせ、R5.12.20、R6.1.24、R6.2.28の3回に分けて開催した。

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

<効果>

- ・チームのメンバーが気になる方について、民生委員や近所の在宅介護支援センターへつなぐケースが生じた。
- ・自治会内に地域包括支援センター・在宅介護支援センターの認知がされ、自治会の行事に参加するなど関係性が深化した。

<課題>

- ・働く若い世代への働きかけ、つながりをつくりたいが、日中仕事をしているため接点がなかなか持てない。

8 チームのアピールポイント

- ・メンバーは他のボランティア活動等を通じて、日頃から早期発見ができる視点がある。
- ・住み慣れた地域住民が日常生活を通して見守ることができる。特別な活動をしなくても、日頃の付き合いの中で気が付いたら、リーダーに相談をしたり、圏域の在支・包括につなげることができる。

9 今後の活動について

- ・今後チームで会議を行い、学習や懇談などの実施を検討する。
- ・新たなチームメンバー獲得のための講座実施について検討していく予定。

船橋市

チーム名 【四丁目ガーデンカフェ三咲】
タイトル 【 素敵なお庭を地域の方々がつながる居場所に 】

1 自治体情報（令和7年4月1日現在）

人口	高齢者人口	高齢化率	面積
650,768 人	155,059 人	23.8%	85.62K m ²
船橋市は こんなところ！	船橋市は千葉県の北西部に位置し、都心や成田空港から近く発達した交通網を持ちます。豊かな自然もあり非常に恵まれた立地条件を備えたまちです。また中核市では1番の人口を誇る都市です。		

2 活動の概要

開始時期	令和6年9月
実施主体	市町村 地域包括支援センター 住民・ボランティア 社会福祉協議会 その他（ ）
活動内容	・オレンジカフェ ・フードバンクふなばしやこども食堂へ野菜提供 ・「おやこでえほんの日」の開催
活動頻度	・毎月第3土曜日 オレンジカフェ（7.8.1.2月は休み） ・カフェ開催前にメンバーにて事前打ち合わせ ・月に2回フードバンクふなばしへ野菜を提供。子ども食堂への野菜提供は適宜。 ・毎月第1水曜日「おやこでえほんの日」
参加費	300円（オレンジカフェ）
運営財源	市町村からの委託 市町村からの補助 会費・参加費 その他 上記の財源 市町村一般財源 地域支援事業交付金 その他（ ）
メンバー構成	コーディネーター（地域包括支援センター） リーダー（住民サポーター） 住民サポーター 職域サポーター（在宅介護支援センター）

チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）
チームオレンジの類型 1	第1類型（共生志向の標準タイプ） 第2類型（既存拠点活用タイプ） 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） その他
チームオレンジ三つの基本 について 2	3つの基本を満たしている 3つの基本は満たさないものの仕組みが構築されている

3 チームオレンジ結成までの流れと経過

コーディネーターである地域包括支援センター職員がオレンジカフェ(住民主体)に参加し、関係強化を図った。R6.3月に主なメンバーへチームオレンジについて説明。コアメンバーで検討してもらい、R6.4月下旬にチームオレンジとして活動したいとの返事を頂く。メンバーとステップアップ講座の方法や時期について相談し、講座を実施。R6.9月よりチームオレンジとして活動する運びとなった。

4 活動内容

お花・野菜や果物がいっぱいの自慢のお庭で年8回オレンジカフェを開催。認知症の当事者・介護者・支援者・地域の人（子供から大人まで）が笑顔でつながることができる「居場所」になっている。時期が合えば野菜の収穫体験やお土産もある。

生演奏でオレンジカフェの歌・懐かしい歌をみんなで歌い、フラダンス、健康体操、寸劇「認知症って？」などを行う。また、おしゃべりタイムにはおいしいコーヒー付き。学生ボランティア体験なども受け入れ、若者や子育て世代との交流も取り入れながら運営している。

フードバンクふなばし・みんなの家こっこ（子ども食堂）と連携し、新鮮な野菜を提供している。R6.11月より絵本の読み聞かせ事業として「おやこでえほんの日」を開始し、現在も継続して実施している。

5 活動を進めていく上で失敗したこと・工夫したこと・配慮したこと

既存のオレンジカフェで意欲的に活動している。オレンジカフェスタッフのコアメンバーを中心としてステップアップ講座を実施し、チームオレンジとして活動をし始め約1年経つが、もともとの意欲的な活動を壊さず、負担感なくチームオレンジとして活動してもらえるよう説明をしている。

広報はチラシの配布、SNSの利用の他、メンバーや参加者による普段の声掛けやつながりの中でお誘いをしている。

6 ステップアップ講座の開催状況・講座内容について

< 講座内容 >

・「気づき」「受け止め」「つなぎ」をポイントとした内容（ロールプレイを含む約180分）。

・講師はチームオレンジコーディネーター（地域包括支援センター職員）

< 開催状況 >

・受講者の意向に合わせ、R6.5.11、R6.7.13の2回に分けて開催した。

7 活動してきたことで得られた効果・見えてきた課題

< 効果 >

チームオレンジとしての活動は始まったところであるが、既存のカフェの運営が7年経つ中で、カフェが段々と知れ渡り、参加人数が増えており、チラシの効果を感じている。また、この7年間の中で、地域の中では認知症について普及されてきており、意識の高さが感じられるようになった。認知症にならないように、認知症になった時に備えてとの予防的な思いでの参加も増えてきた。介護者側の参加者からは、楽しかった、話せて良かったとの声があり、次回に友人を誘ってくる人もおり、人と人とのつながりの大切さを感じている。

これまでの課題であった、多世代交流のきっかけとなる「おやこでえほんの日」も参加者が増え軌道にのり、オレンジカフェの参加者が絵本の読み聞かせをしてくれるなど交流も出て来ている。

< 課題 >

「ふれあい食堂」という、地域食堂を令和8年1月に開催する予定であり、地域での交流の場としていきたいが、ボランティアの負担の増加が課題となっている。

8 チームのアピールポイント

・代表者が自宅のお庭で果物や自家栽培の新鮮な野菜をふるまい、地域の方々がつながる「居場所」にしたいと思い立ち上げたオレンジカフェ。おしゃべりタイムの時間を大切に、参加者が笑顔になることを大事にしている。通りすがりに気軽に立ち寄れて、幅広く地域とつながれることを目指している。

【ホームページ】



9 今後の活動について

・今後、多世代の交流を視野に活動を考えており、「ふれあい食堂」の開催予定。